

---

# 幻夢抄録 目覚め 3章

維月十夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻夢抄録　目覚め　3章

### 【Zコード】

Z0764A

### 【作者名】

維月十夜

### 【あらすじ】

瑪瑙に連れられてぐぐつた、異界の門。しかし、氷魚の目の前に現れたのは、どこまでも果てない、広大な砂漠だった！？

「ねえ、ちょっとー聞いてる?どこ行くのよ?」

氷魚と瑪瑙は、砂利道を歩いていた。辺りはもう、すでに暗い。「どこって、今説明したろ?よし、ここらでいいか」

瑪瑙は、橋の側に立つと、小声で、なにかを唱え始めた。

川は、月の光をうけ、白銀の花びらを散らし、仄青く輝きながら、水面に門を浮かび上がらせた。

門、といつても、決して石造りの物ではない。水そのものが、門の形をとつてしているのだ。

「なに、これ?」

「出口を開いた、水を媒介にしてな。こいよ、氷魚」  
瑪瑙は、橋から飛び降りた。橋は高く、川も大きくて、深い。しかし、水にぶつかる、衝撃音がないところを見ると、平気のようだ。

「やだつー怖いしつ…この橋って、高いのよ!」

氷魚は、後じさつた。

「やれやれ、しようがねえな…」

瑪瑙は、一蹴りで、橋の上にいる氷魚の側に着地すると、やにわに氷魚を抱き上げた。

「んなつ!…ちょっと、離しなさいよつ…バカつ、変態つ…」

「つたぐ、ちつとは落ちつけ…早くしねえと、門が閉じちまうだろうが!」

「も…いやつ!」

「はいはい…通るぞ~」

まだ暴れる氷魚を抱き込み、瑪瑙は、再び橋から飛んだ。

高く虚ろな、水音によく似た音がして、止まっていた時間に、色彩が戻る。しかし、そこにはもう、水の門も、一人の姿もなくなつていた。

「ん、う…」

（あつたかい、心臓の音が、心地いい…誰の、だっけ？）

長時間揺られて、うとうとしていた氷魚は、頬に、温もりを感じて、目を覚ました。

「お、目覚めたか。今、丁度着いたところだ」

氷魚は、目を見張った。

「な、な、何よここ !？」

砂漠、だつた。二人の前には、広大な砂漠が、広がっていた。  
見りや分かんどう？砂漠だよ」

瑪瑙は、氷魚を降ろす。

「まさか、今から砂漠渡るなんて言わないわよねえ？」

皮肉たっぷりに、言つてやつたつもりだが、瑪瑙は、真顔で「そうだ」と返してきた。

「ああ、もう…殴つてやりたい」

氷魚は、がっくりと頸垂れた。

（なんの準備もなく、進めるワケないじゃない！）  
内心、氷魚はひどく毒づいた。

確かに、氷魚の服装は、およそ砂漠に向いた物ではなかつた。  
タンクトップに、膝丈より短いスカート、そして、履き古したスニーカー。

「ホレ、これ被つてろ。日よけだ」

瑪瑙は、氷魚に、白い布地を投げ渡した。

「あ、ありがとう…」

「いいよ、大丈夫なら、行くぞ？」

「そういう瑪瑙は、なにも被つてなくても、平氣なの？」

瑪瑙の隣に並んで、氷魚は問うた。

「あ？俺はいいんだよ、慣れてる」

「そなんだ、ホントに？」

「ああ…」

「ねえ、これから行く場所って、どのくらい? 近いの?」「近い、ことになるかな。三ヶ月くらいで着く」「もづ、驚かないわよ… そづ、三ヶ月ね。それで、その間つてやつぱり…」

「野宿になるな」

「食べ物とか、どうするの?」

「ま、何とかするわ」

「何それ…」

砂漠の、寒暖の温度差は激しく、夜の冷え込みは厳しい。

二人は、焚き火の側で、野営していた。

「さつ、寒い…冬みたい、つづん、冬よりも寒い」

「冬は、これよりもっと厳しいぜ? 一定の、動植物しか生きられん気候になる」

「じゃあ、他の動物は、死んじゃうって事?」

「家畜以外はな… 多分」

「ふあ…」

氷魚は、欠伸をかみ殺した。

「眠いのか?」

「うん…」

「氷魚、その…なんだ、悪かつたな、急展開だつたら。疲れたよな、少し休め」

「うん、ありがと…少し、休むね?」

氷魚は、地面に伏せると、ほぼ同じに眠つていた。

「もう寝てらア… 疲れたよな、ごめんな」

囁くよみに眩いで、瑪瑙は、ずっと氷魚を見ていた。

夜明け前、まだ空も白まないつむじ、二人は野営地を去つた。

冷え込みは厳しいが、日中に砂漠を渡るよりは、幾分かマシなので、しかも、日中に比べ、かなりの広範囲の移動が可能なためだ。

「瑪瑙、待つて、きや！」

何もない砂だと思っていたが、彼女は、障害物に躊躇<sup>つまづ</sup>いた。

「ふつ。なんだよその格好……」

「つまづいたのよ。もつ、なによ、そんなに笑わなくたって、いいじゃない！」

「「めん、「めん…ほら」

瑪瑙は、転んだ氷魚に、手を伸ばした。

「ありがと、ああもう…砂だらけ」

文句を言いながら、砂を払う氷魚に、瑪瑙は目を細める。

砂漠を渡つて、すでに、いつの間にかに、一ヶ月半が過ぎていた。

「もう、いやだつたら…」

氷魚は、振り向いて砂を睨みつける。

氷魚がつまづいた場所には、今はもう、何もなくなっていた。

「なんだつたんだろ？」

「躊躇<sup>つまづ</sup>ただけだろ？ 行くぞ」

「うん…」

（な んか、おかしい、釈然としないなあ）

彼女が、瑪瑙を追つて背中を向けた刹那、彼女から、そう離れない砂地が、沸くように盛り上がり、鋭利な爪を持つ何かが、突き出される。

それは丁度、蜘蛛のような節足動物の脚に、ひどく似ていた。

突き出された脚は、周囲の砂を大きく搔くと、再び、砂の中へと沈み、それが通つた後には、巨大な穴だけが残された。

追跡者は、彼女に狙いを定めたのだ。地中深く潜り、力を蓄えながら、獲物が弱る瞬間を待つていて。

（いる…やつぱり、何かが！これは危険だ！？）

氷魚の中で、警鐘が鳴る。耳の奥で、血汐が逆流する音を、聞いた気がした。

「…お、どうした氷魚っ」

「あ、な、何？」

話しかけられていたのに、気がついていなかつたようだ。

「どうした？青い顔して…少し休むか？」

「ううん、先を急いひ

「珍しいな、お前が急いひだなんて…」

「そう？たまにはね」

叫びそうになるのを、必死でのみ込み、氷魚は笑つた。

氷魚は、多大な殺意に、ただ、青ざめることしかできなかつた。すでに、日は高く、砂丘の向こうには、陽炎がたち上つていて、汗を拭うことも忘れ、ひたすら、氷魚は足を進めた。

「なあつ！氷魚、お前…やつぱり眞合悪いんだろ！？なんで、何も言わねえんだよ！」

ついに、見かねた瑪瑙は、氷魚の腕を掴んだ。

「平氣、何でもないつたら！早く行こう」

振りほどこうとする、氷魚の腕を、彼はさらりと握る。

「そんな青い顔してつ！なにが平氣なモンかっ、どうしたんだよ？」「瑪、瑙…あたし、あたし狙われてる…止まつちやダメなのよ…！」

捕まつちやうつ

「なんだと！誰にだつ！？」

彼にとつて、氷魚に近づく、悪意を持つ者は、敵と同義に見なされる。

「わ、分かんない…でも分かるのつ！」

「大丈夫だ、暑さで、幻覚を見たんだよ」

とにかく、少し休もう、と言いかけた瑪瑙は、異変に気がついた。彼女の足元の砂が、不自然に盛りあがり、様子を伺つように、尖つた爪を持つ、脚が蠢いていたのだ。

「氷魚、俺の側から離れるな！あーあ、俺としたことが、油断したもんだよ」

「瑪瑙う…

氷魚は、瑪瑙にしがみつく。

「ここはヤツの巣だ、おいでなすつたぜ」

氷魚は、戦いた。耳の奥で、鼓動がうるさい、その音は、潮騒の音と、ひどく似ていた。

砂が流れ始めてすぐ、それは姿を現した。

ギチギチ、と耳障りな音と共に、現れたのは、巨大な蟻地獄だった。

氷魚は、ヒツと喉を鳴らして、一步後ずかる。

「なに、大したヤツじゃねえ…心配すんな」

妙に、自信ありげな瑪瑙の腕を、氷魚は掴んだ。

「無理よ！あんなでかいの、一人じゃ…」

「大丈夫だ、信じろ！」

その先を言おうとした氷魚を、瑪瑙はきつぱりと言い放ち、遮る。彼は、腰の長剣を抜いていた。

（刀！？瑪瑙、そんなの持つてたつけ！？）

「お前、まさか『二連』（にれん）を知らないわけ、ねえよなあ？」

そう言って、瑪瑙は切っ先を向ける。

二連、その名を聞いて、動きを止めた敵に、瑪瑙は、面白そうに、にやりと笑った。

（二連！？あの化け物、もしかして…瑪瑙を怖がってる？…）

「正確に、もう二連じゃねえがな！俺に出会ったのが、運の忽きだつ！」

瑪瑙は、刀を構えて飛びかかる。

蟻地獄は、勢いよく後退して砂に潜り、完全に姿を隠す。

どうやら、形勢不利だと判断したようだ。

「チツ…潜りやがった」

「瑪瑙！あいつは…つ」

「来るなつ！」

走り出そうとした氷魚を、瑪瑙は止めた。

「あつ」

「まだ動くんじゃねえ、両方の触角を切つたが、油断は禁物だ」

「う、うん」

氷魚は、周囲を、警戒しながら見まわす。

その時、砂の中から伸ばされた脚が、氷魚の足を掴み、彼女の足を、砂地に縫いつけた。

「きやああつ！あつ、足がつ！？」

「つたぐ、諦めの悪い！引きずり出してやるー。」

瑪瑙は、氷魚から、そう離れていない砂地に、剣を突き立てる。

氷魚の足を掴んでいた脚は、短い悲鳴と共に、氷魚の足を離した。

「瑪瑙！」

「早く掴まれ！翔ぶぞっ」

「うんっ！」

瑪瑙が、刀を引き抜いて翔びあがると同時に、砂地が爆発し、苦しみに悶える、蟻地獄が姿を現した。

ややしじばらぐ、脚は砂を掻いていたが、すぐ行動がなくなつた。

「『』めんね、瑪瑙」

「あ？ 何がだよ…」

「嘘、ついちゃつて…だつてほら、迷惑かな、つて思つたんだ」

「んな訳あるかい…」

「ぼそり、といふ瑪瑙。

「え？」

「だから、別に、謝んなくともいいんだよ」

「ありがと、瑪瑙」

「…ねうよ」

「一人の旅は、まだ始まつたばかり。  
今日も、故郷を目指して、旅は続く。」





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0764a/>

---

幻夢抄録 目覚め 3章

2010年10月28日03時04分発行